

台湾彰化県鹿港鎮の市街地における都市機能の地域的配置

松井秀郎*

キーワード：台湾、鹿港、都市機能、老街、地域的配置

1. はしがき

「鹿港」は、清朝時代（1662～1895年）からの開発の歴史を有し、台湾では古くから発展してきた都市の1つである。こうした都市には、その発生以来の栄枯盛衰の過程で生まれた諸機能が形を変えつつ蓄積しており、これらがまたその都市の魅力ともなっている。この「鹿港」の都市としての起こりは、河口に発達した港湾機能による港湾都市であった。しかし、砂泥の堆積による港の機能の衰退や、その後の鉄道交通の要衝から外れたことから、都市の勢いが衰退してきたのである。筆者（2017）はこの鹿港鎮の市街地の拡大について、この市街地が清代の旧港町を核として周辺への外延的延伸と、主要道路に沿った放射的延伸とによって拡大してきた過程を、主に日本統治時代から2000年代までの地形図や文献により明らかにした。

このような「鹿港」の発展史について葉大沛（1997）は、1.「興起1681（康熙20）～1783（乾隆48）年」、2.「鼎盛1784（乾隆49）～1839（道光19）年」、3.「衰退1840（道光20）～1894（光緒20）年」、4.「没落1895（光緒21）～1945（民國34）年 日據時期」¹⁾の4期に分けて記述している。また「鹿港」の発展と衰退の歴史や地誌的内容については、施添福（1998）が『鹿港鎮志地理篇』を主宰して「自然環境」・「市街發展」・「名勝古蹟」の3章に分けて記載している。その後、これ等の文献なども踏まえて彰化縣文化局（2008）は鹿港市街地の変遷について、1.「清代」、2.「日治初期」、3.「日治明治37年前後」、4.「日治昭和10年」、5.「日治末期」、6.「戦後1945-1946年間」、7.「民國60年以降」、8.「民國65年以後」、9.「民國73年以後」、10.「民國75年～迄今」の10期に分けて各時期の市街地發展の特徴について述べている。

2004年には彰化県の主催する「彰化研究兩岸學術検討會 鹿港研究」が鹿港鎮において開催され、この成果が『二〇〇四年彰化研究兩岸學術検討會—鹿港研究論文集』

としてまとめられた。これには鹿港研究として歴史・芸術・建築・産業發展などに関する27編の論文が掲載されている。なかでも黄文彬・莊翰華（2004）らは、鹿港鎮の都市發展を空間的發展モデルの事例研究として取り上げて検討している。また頼志彰（2004）は、鹿港鎮の發展を、1. 漁港發達期（明鄭1660—清中葉1780）、2. 内河航運時期（乾隆中葉1780—道光年間1840）、3. 拡大延続と苟延殘喘（かろうじて保持）²⁾時期（道光年間1840—日治前期1900）、4. 鉄道交通から離れた内陸小都市時期（日治前期1900—戦後1980年代）、5. 文化古蹟を中心とした全面的改造時期（1980年代—現在まで）の5期の歴史的發展期に分けて論じている。

このように發展と衰退の過程を経てきた鹿港鎮であるが、清朝時代以降に發展してきた他都市の成長からは取り残され、却って旧跡が残り、現代ではこれらが魅力となって海外からも観光客の訪れる観光都市として賑わうこととなっている。こうした鹿港鎮における観光客の増加については、徐秀珍・蔡進發・葉時碩・黄宗成（2004）らが推定モデルを基に遊客人口³⁾の将来予測をしている。

彰化縣文化局（2008）の発刊した『彰化縣 鹿港聚落活化暨環境整合計畫案』では、市街地東部の復興路⁴⁾、西部・南部の復興南路、北部の光復路に囲まれた東西方向に約8.8kmと南北方向に約9.8kmの中山路を中心軸とする範囲、の観光を核とした地域活性化について計画案を提示している。この計画案の調査では、過去の資料分析や各分野の専門家の意見聴取、また住民や来訪者へのアンケート調査や個別建物の調査を行い、公聴会も実施している。

鹿港鎮の観光發展は新たな段階に移ろうとしている。彰化県は鹿港鎮の観光發展の推進のために国家歴史風景区の設置に向けての取り組みを行っており、2015年には「推動鹿港國家歷史風景區 第一次地方說明會」が開かれた。ここでは、鹿港市街地を「核心区」として内陸側の周辺地域に「地方風土再造」、海浜側に「西濱生態廊道新風貌」を配置する基本区分構想が提起された。更に

* 立正大学地球環境科学部

2016年に「鹿港國家歴史風景區計畫 第二次地方説明會暨推動委員會大會」が開かれ、國家歴史風景區に設置される「畫物館計畫」・「環境風貌計畫」・「文化計畫」・「觀光計畫」・「交通計畫」の5計画についても説明がなされた。今まさに、鹿港鎮は観光地域化への動きを加速化しようとしている状況にある。

本研究の目的は、上記のような発展と衰退の過程を経て、更なる変貌を遂げつつある鹿港鎮の市街地中心部について、ここに蓄積している幾つかの商業機能や公的機能などの都市的機能の地域的配置とこれらの特徴を明らかにすることにある。研究に当たっては、鹿港鎮の調査地域での車載ドライブレコーダーによる道路沿線の撮影や、アクションカメラによる店舗外観の撮影調査を2017年5月・10月に実施した。これらの撮影動画による都市的機能の把握の他に、これらの諸機能に関して『彰化縣工商消費電話簿』と中華電信黄页⁵⁾による確認を行い、両者が一致した都市的機能については実在して機能しているとして分布図を作成して追究した。

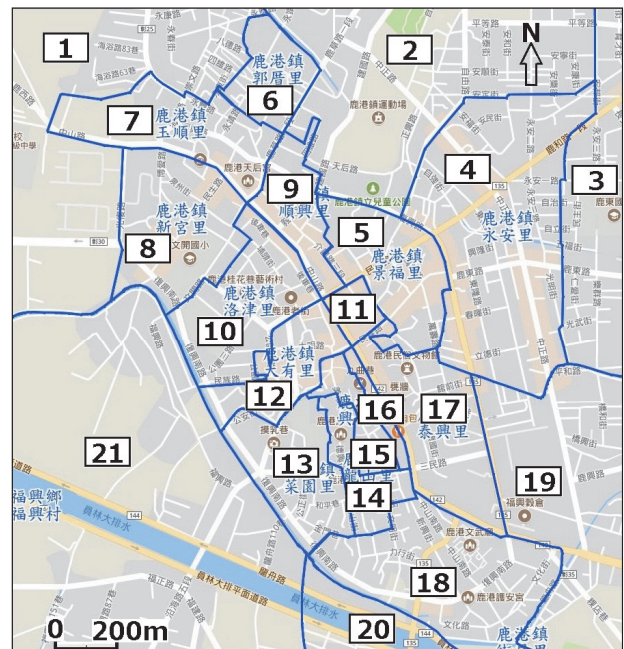
2. 鹿港鎮中心市街地とこの周辺地域における人口変化

台湾の2016年末の人口総数は23,539,816人であり、この内、彰化県（県轄市である彰化市・員林市並びに6つの鎮と18の郷で構成される）の人口は1,287,146人、彰化県鹿港鎮の人口は86,709人となっている⁶⁾。鹿港鎮の中心市街地には中心商業地域の中山路が北西から南東にかけて貫いており、この市街地は鹿港鎮の南側に隣接する福興郷（47,479人）の福興村・橋頭村・西勢村にも延伸している。

鹿港鎮は29の里によって構成されている。これらの内で鹿港鎮の中心市街地の広がる18里と、福興郷を構成する22村の中で鹿港鎮の中心市街地の延伸する3村を合わせた21の里・村について、2011年末～2016年末迄の5年間の人口変動を検討した（図1）。図1のグラフ表記を見ると、21の里・村全体では人口が増加して、年平均人口変動率もプラスとなっている。しかしながら個別の里・村では年平均人口変動率のプラスの里は4里のみであり、残りの14里・3村では人口が減少し、年平均人口変動率もマイナスとなっている。

人口の増加した東石里（地区番号1）・埔崙里（地区番号2）・頂厝里（地区番号3）・永安里（地区番号4）の4里については、概ね鹿港鎮の中心市街地の北西側・北側・北東側に位置しており、東石里・埔崙里・頂厝里

鎮・郷	地区番号	里・村名	2011年12月末人口(人)	2016年12月末人口(人)	2011～2016年間の年平均人口変動数(人)	2011～2016年間の年平均人口変動率(%)	年平均人口変動率グラフ表記 - 0 +
鹿港鎮	1	東石里	5,072	5,293	44	0.87	■
	2	埔崙里	5,504	6,106	120	2.19	■
	3	頂厝里	8,999	9,752	151	1.67	■
	4	永安里	5,430	5,526	19	0.35	■
	5	景福里	1,398	1,317	-16	-1.16	■
	6	郭厝里	695	641	-11	-1.55	■
	7	玉順里	1,591	1,448	-29	-1.80	■
	8	新宮里	1,123	1,017	-21	-1.89	■
	9	順興里	1,129	1,093	-7	-0.64	■
	10	洛津里	1,076	1,018	-12	-1.08	■
	11	中興里	624	596	-6	-0.90	■
	12	大有里	1,401	1,373	-6	-0.40	■
	13	菜園里	1,275	1,213	-12	-0.97	■
	14	龍山里	916	883	-7	-0.72	■
	15	興化里	812	767	-9	-1.11	■
	16	長興里	359	340	-4	-1.06	■
	17	泰興里	1,582	1,525	-11	-0.72	■
	18	街尾里	2,825	2,802	-5	-0.16	■
福興郷	19	橋頭村	3,185	3,099	-17	-0.54	■
	20	西勢村	2,439	2,421	-4	-0.15	■
	21	福興村	4,321	4,289	-6	-0.15	■
計			51,756	52,519	153	0.29	■



資料：「彰化縣鹿港鎮民國100年12月各里現住人口數按性別及年齡分統計表」並びに民國105年の同様資料により松井秀郎作成。

図1 彰化縣鹿港鎮中心市街地とこの周辺地域における里・村の人口変動（2011～2016年）

の3つの地区は市街地の外縁部となっている。これらの中で、最も年平均人口変動率の高かった里は2.00%を超えた埔崙里であった。ここには鹿港鎮の中心市街地から、海岸沿いに北上する省道17号線（西部濱海公路）に繋がる鹿草路が通っており、更にこれよりも海岸沿いを通る快速公路61号線への接続も利便である。また埔崙里の次に年平均人口変動率の高かった頂厝里は、鹿港鎮の中心市街地では北東側に位置する。ここには鹿港鎮の北方に

隣接する和美鎮の中心市街地へとつづく鹿和路や、東方の国道1号線（中山高速公路）のインターチェンジに繋がる鹿東路などが通っている。東石里の年平均人口変動率は第3位であり、ここは西方の工業地帯の埋立地「彰濱鹿港工業区」への2つの出入り口となる鹿安橋と鹿工路への経由地となっている。永安里は年平均人口変動率第4位である。永安里は頂厝里の西に隣接し、市街地中心部の中では比較的新しい開発地域であり、道路幅の広い中正路がこの里をほぼ南北方向に貫いている。

他方、年平均人口変動率の最も低い里は新宮里（地区番号8）である。ここには、泉州街と呼ばれる清朝時代に大陸の泉州から渡ってきた人々の多く住んでいた街区があり、古くからの歴史を持つ地区である。次に年平均人口変動率の低い地区は玉順里（地区番号7）である。ここにある鹿港天后宮は、媽祖を祭る清朝期（乾隆初年）に創建された廟であり、民間の信仰の中心であると共に、鹿港鎮の観光資源の重要な柱の1つともなっている（中鉢令兒2015）（写真1）。第3位に年平均人口変動率の低い里は、郭厝里（地区番号6）である。この里には中国の泉州から分霊された鹿港北頭の忠義廟があり、清朝の乾隆55（1790）年から祭祀が始まったとされる。また、ここはかつて北頭漁村と呼ばれた漁業の拠点でもあった。これら新宮里・玉順里・郭厝里の3里はいずれも年平均人口変動率-1.50%以下と、鹿港中心市街地では最も人口減少傾向の強い地域であり、鹿港鎮中心市街地の北西部に位置する清代から開発された歴史を有する里である。



写真1 鹿港天后宮
2017年5月松井撮影

そして、景福里（地区番号5）・興化里（地区番号15）・洛津里（地区番号10）・長興里（地区番号16）などの鹿港鎮の中心市街地の中央部の里では、年平均人口変動率は-1.50%~-1.00%の間にあり、鹿港鎮中心市街

地の北西部に次ぐ人口減少傾向を呈している。また菜園里（地区番号13）・中興里（地区番号11）・泰興里（地区番号17）・龍山里（地区番号14）・橋頭村（地区番号19）などの鹿港鎮中心市街地の中南部の里では、年平均人口変動率は-1.00%~-0.50%の間の値を示している。鹿港鎮中心市街地でも、中山路に沿う地域と西南部の旧鹿港溪に沿う地域を含む大有里（地区番号12）や、鹿港鎮中心市街地の最南部に位置する街尾里（地区番号18）、また河道の付け替えによって地続きとなった、かつての旧鹿港溪の左岸の福興村（地区番号21）・西勢村（地区番号20）などでは、年平均人口変動率-0.50%~0.00%の間の値を示しており、これらの里・村は若干の人口減少地域といえよう。

鹿港鎮中心市街地における里・村別人口統計を2011~2016年迄の5年間で検討してきたが、大観すると中心市街地の北西側・北側・北東側の市街地外縁地域では人口増加が著しく、ことに埔崙里・頂厝里でこの傾向が強い。一方、人口減少の甚だしい里は新宮里・玉順里など、中心市街地の北西部の清代末からの発展地域である。人口減少傾向はこの北西部よりも中心市街地中央部では弱く、更に南部では弱い傾向にある。そして中心市街地の市街地化の古い地区ほど人口減少傾向は強く、これらより相対的に市街地化の新しい地区では人口減少傾向の弱いことが明らかとなった。

3. 台湾及び彰化県・鹿港鎮の旅客数の変動

1) 台湾での旅客数の変動

鹿港鎮が台湾の国家歴史風景区の設置に向けて、観光を柱とする地域発展を計ろうとしていることは既に「しがき」で述べた。しかしながら台湾へのインバウンド観光（Inbound Tourism）には政治的な影響も強く反映している。それが国家的な観光地域を目指す鹿港鎮の観光客流動にも反映してくることから、まずは台湾における旅客数の変動について検討したい。

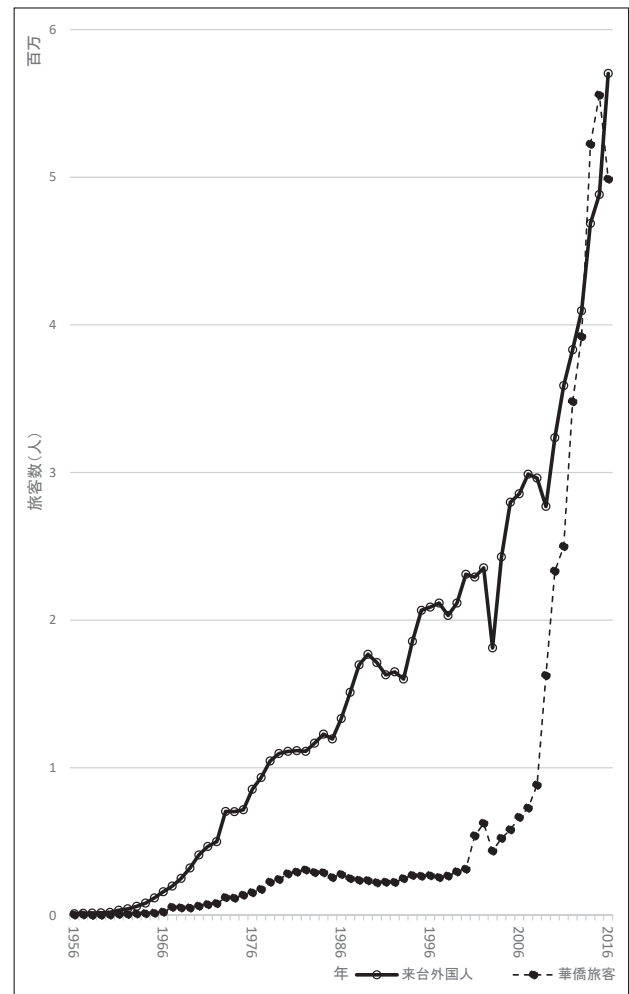
2016年の台湾への旅客数は10,690,279人（観光目的は7,560,753人）に達している⁷⁾。1956~2016年迄の來台旅客数の変化をみると、全体としてはこの60年間で1956年の14,974人（目的別集計はない）の約714倍にも達している。同期間の來台外国人の増加倍率をみると、外籍旅客では486倍であるのに対して、華僑旅客（台湾の統計では「大陸」（Mainland China）を含む）では1,539倍であり、これには「大陸」からの旅客増加の影響が顕著に表れたものである。台湾交通部観光局の「観光統計資

料庫統計「歴年来臺旅客按居住地分」による国・地域別の来台旅客数では、2010年迄は日本が第1位であった。しかし、2011年以降は「大陸」が第1位となり、2016年では「大陸」が3,511,734人（全体の約33%）であるのに対して、第2位の日本は1,895,702人（同18%）となった。「大陸」に香港・澳門（マカオ）の1,614,803人を加えると5,126,537人（同48%）となり、全訪台旅客数の約半分を占めることになる。台湾への日本人観光客の動向について佐藤和美（2011）は、台湾政府が2009年を「台湾・日本特別パートナー関係促進年」と定めて、経済貿易・文化・青少年・観光・対話の5つのテーマを主軸に交流強化を推進する方針を発表したものの、2009年の日本人入国者数はわずかに減少したとして台湾の観光競争力について論じている。

1956～2016年迄の来台旅客数の推移を見ると、台湾への旅客数も世界的な経済現象やパンデミック（pandemic）の影響を受けたり、中華人民共和国との政治的関係に影響されて変化している（図2）。外籍旅客の推移では1991～1993年にかけての日本のバブル崩壊（第1次平成不況）期には、訪台旅客数の第1位であった日本の旅客数は1990年の約92万人（同47%）から1993年には約70万人（同38%）に減少したが、翌年の1994年からは回復している。また、2003年の旅客数の急減では2002年11月から2003年7月にかけて中華人民共和国南部を中心として香港や約30数カ国で発生したとされる感染症のSARS（サーズ：重症急性呼吸器症候群）の影響もうかがわれる。2009年には2008年の世界金融危機（リーマン・ショック）を契機とした景気後退に加えて新型インフルエンザが流行する等の影響で、台湾のみならず世界的に観光への影響が見られた。台湾内の観光環境の整備として、2007年の台湾新幹線台北～高雄間の開業や2008年からの訪台日本人の90日間ビザ免除もなされた。台湾内の政治的变化からみれば、1987年には戒厳令が解除され、1988年には李登輝総統が就任した。2000～2008年の陳水扁総統時代には、2001年に台湾の離島である金門島・馬祖と中国対岸都市の厦門を結ぶ船舶直接運航（小三通）が実現した。また、2005年の春節期間中に中華人民共和国の航空会社による台湾への直行チャーター便の運行も実現し、更に2006年には直行チャーター便の運航は年3回の節日（春節、端午節、中秋節）に拡大した。

2008～2016年の国民党の馬英九総統時代になると中華人民共和国からの訪台が解禁され、訪台旅客の激増が起きて2015年には「大陸」からの訪台旅客は約418万人まで増加した。しかし、2016年の蔡英文総統の就任後には

「大陸」からの訪台旅客は約351万人にまで減少している。



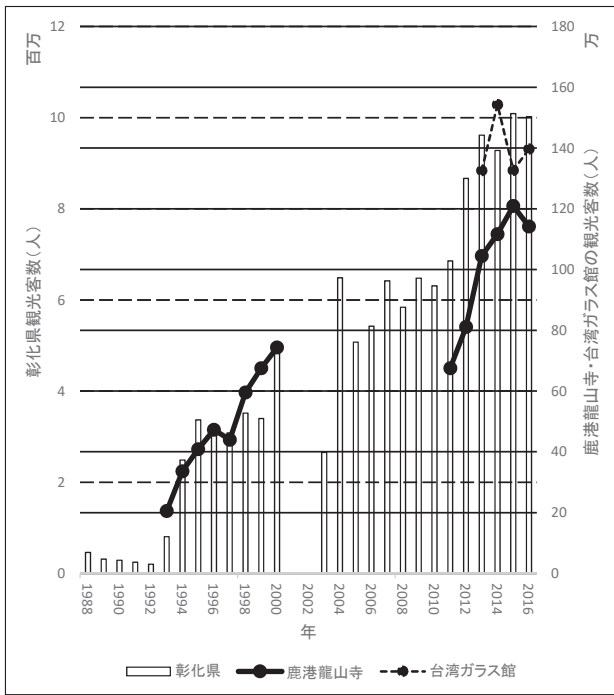
資料：「台湾交通部観光局 観光統計資料庫 来臺資料」により松井秀郎作成。

図2 来台外籍旅客並びに華僑旅客数の推移（1956～2016年）

2) 彰化県及び鹿港鎮における観光

彰化県における観光客数は、台湾へのインバウンド観光の旅客数の影響を受けるものの台湾内での日帰り観光客を含むため、来台旅客数の推移とは異なる推移を示している（図3）。2003年のSARSによるとみられる観光客数の減少と翌2004年の急激な回復は来台外国人の動向と同じ傾向を見せているが、2005年にはこの反動なのか観光客数の減少がみられる。統計数値の取り方にもよると思われるが、観光客数の延べ人数は2016年には10,024,417人にも上っており、全体的には右肩上がりの増加傾向にある。

彰化県政府観光ガイドの用いる「9カテゴリー」で、鹿港鎮の各観光スポット数を見ると、数の多いものから「歴史古蹟」（歴史と旧跡）29カ所・「工藝導覽」（工



資料：「彰化縣政府 主計處 統計資料」により松井秀郎作成。

図3 彰化県・鹿港龍山寺・台湾ガラス館の観光客数の推移（1988～2016年）

芸ガイド) 15カ所・「展覧博物」(資料館と博物館) 8カ所・「宗祠廟宇」(祖廟と寺社) 7カ所・「休閒玩樂」(レジャー) 4カ所となり、「花田農園」(樹園地と観光農業)・「登山歩道」(登山遊歩道)・「人文鉄道」(交通関連文化)・「自行車道」(自転車道)では0カ所である⁸⁾。このことから鹿港鎮の観光資源では歴史的物事や伝統産業に重点があることがうかがえる。

鹿港鎮の観光スポットの中で、観光客数の統計が公開されている鹿港龍山寺と台湾ガラス館(台湾ガラス館)について、その推移を見てみよう(図3)。鹿港龍山寺の観光客数の統計については1993年から彰化縣統計年報に記載があり、1993～2000年の数値の出典根拠は龍山寺監理委員会となっている。この1993年の鹿港龍山寺への年間観光客数は205,278人である。2011～2016年では交通部観光局の編成による資料となっており、これによれば2016年の鹿港龍山寺への観光客数は1,141,970人となっている。資料の出典が異なるが、単純には観光客数は23年間で約5.6倍に伸びたことになる。鹿港龍山寺は17世紀中頃に旧港の近くの大有街に建てられたが、清朝時代の乾隆51(1786)年に現所在地の龍山街に移された。鹿港龍山寺は1983年に第一級国定重要文化財に認定された名刹である(写真2)。この鹿港龍山寺の文化的価値と地域づくりへの役割については黄世輝・田中みなみ・三橋

俊雄・加藤純一郎・宮崎清(1996)の研究があり、観音菩薩を主神とする鹿港龍山寺の祭祀圏が彰化県一帯に広がっており、多くの人々の訪れる憩い・交流の場となっていることについて明らかにしている。そして、鹿港鎮の市街地には鹿港龍山寺のような寺廟・古蹟が中山路を軸とする方向に広がっている(写真3)。

台湾ガラス館は、2003年3月に「彰濱鹿港工業區」内に完成した新しい観光スポットである。台湾ガラス館は、台湾内に136カ所(2017年6月)ある「観光型工場」(観光型工場・観光工場)の1つであり、ガラスで造られた台湾護聖宮という媽祖を祀る廟が設けられ、台湾ガラス製品博物館の見学やガラス工芸品の土産品も販売される



写真2 鹿港龍山寺
2017年5月松井撮影

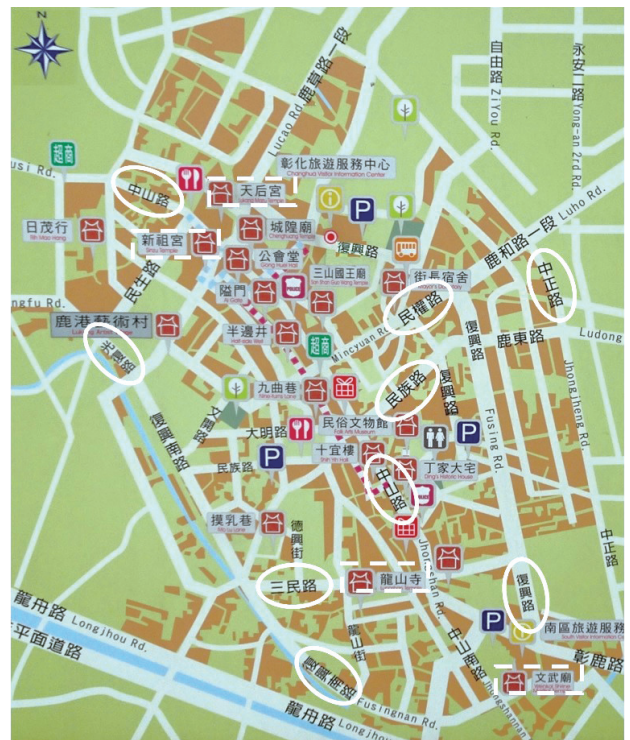


写真3 鹿港鎮観光導覧地圖(観光案内図：一部加工)
2017年10月松井撮影

ことから、観光施設として人気がある⁹⁾。台湾新幹線台中駅から路線バスもあり、また大型観光バスによる集客によって、観光客数は開設当初から鹿港龍山寺を上回っている。

鹿港鎮に関する統計値としての観光客数としては上記の鹿港龍山寺と台湾ガラス館のもののみである。しかしながら、正確な観光客数の統計はないものの、台湾の三大古都の1つとも称される鹿港鎮での観光の魅力は何とんでも観光スポット数の多い「歴史古蹟」である。年間を通して「歴史古蹟」に含まれる老街¹⁰⁾や寺廟を中心として多くの観光客が鹿港鎮を訪れている。

鹿港鎮の中心市街地には2つの老街が見られる。1つは「古蹟保存区」に指定されている鹿港老街（古市街）である（写真4）。鹿港老街は瑤林街・埔頭街・大有街の1帯であり、清朝乾隆年間当時の「鹿港」が最も繁華な時期の主要街区の遺構である（彰化縣鹿港老街發展促進會2008）。



写真4 鹿港老街埔頭街
2017年5月松井撮影

もう1つは中山路老街である。この中山路老街は、鹿港老街の発展後に、鹿港溪に平行して次第に発展した伝統的長條形聚落の中を貫いた五福大街が起源であり、当時は不見天街とも呼ばれていた（彰化縣鹿港鎮公所2007）。この不見天街的建築方式について、茂木計一郎（1991）は「不見天とは、非常に狭い街道の上に、平らな、あるいは切り妻屋根をのせたもので、両側に市場が続く。鹿港が栄えた18C中～19C中に、不見天がたくさん造られたといわれている。防風・防雨のために、あるいは初期の移住生活においては、外敵から身を守るために、店前の街道を覆ったものと考えられるが、発生の詳細は不明である。」と記している。不見天街では、街路の上を覆っていることから、まさしく天（空）が見えないことになる。この五福大街では日本統治時代の1934（昭和9）年に道路拡幅が行われ、現在の中山路の原型

となった。この時に建築物の立面に各種の精緻な装飾が施されるようになり、鹿港中山路老街として知られるようになった（写真5）。鹿港中山路老街は鹿港鎮の中でも中心商店街をなす街路であり、この延長距離は北西部にある鹿港天后宮から南東部にある文武廟迄の約1.7kmである。鹿港中山路老街については、西川博美・中川理（2013）が町並み保存事業の観点から斗六太平路老街（雲林県）・西螺延平路老街（雲林県）・新化大目降老街（台南市）・旗山中山路老街（高雄市）とともに保存・整備における取り組みを整理している。また鹿港中山路老街を富田芳郎の老街の分類に基づき昭和型として「・コンクリート造、煉瓦造でも外面にセメントを塗る・色調が灰色を呈している・扶壁はもうけず、装飾も簡素となる」と分類している（西川博美・中川理2014）。この鹿港中山路老街にも各建物の道路側には「亭仔脚」¹¹⁾と呼ばれるアーケード状の歩道が設置されており、李東明・波多野純（2001）のいう歴史的町並みの特徴をなしている。

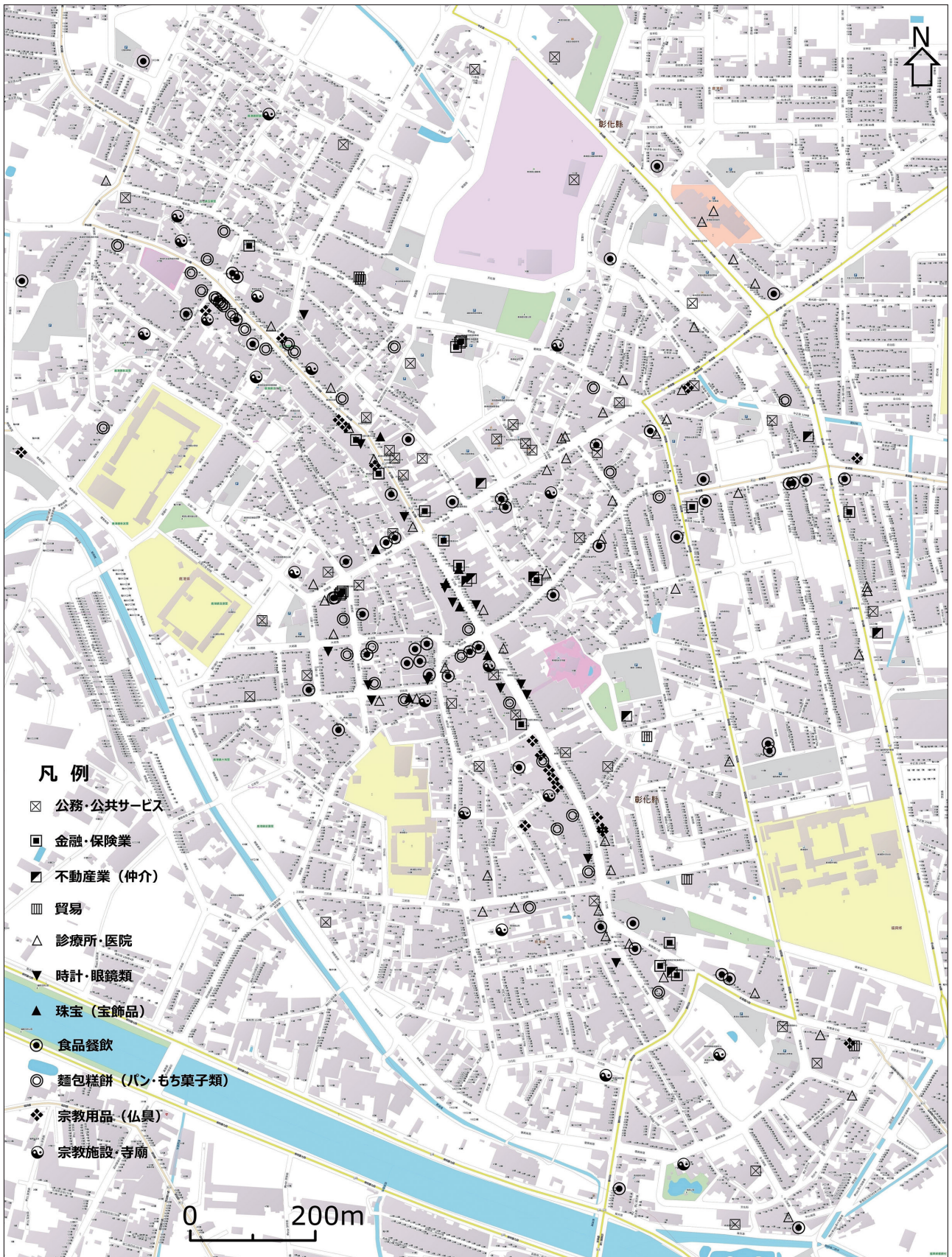


写真5 鹿港中山路老街
2017年10月松井撮影

このような観光スポットの他に市街地には多数の寺廟や三合院造りの家・豪商の家の遺構などがある。また名物料理として海鮮料理（カキ・シャコ・アサリ・小エビなどを用いての、から揚げ・包み揚げ・オムレツなど）・麵線糊（煮込みそうめん）があり、牛舌餅（牛舌の形状のパイ）・肉包（肉まん）・蒸しパン・カラスミなどの伝統的な土産類も充実していることが観光地としての魅力を高めている。

4. 鹿港鎮の中心市街地における諸機能の配置とその特徴

鹿港鎮の中心市街地は隣接する福興村にまで広がっており、ここには地方中心都市としての性格を支える機能



基図：中央研究院人文社會科學研究中心 地理資訊科學研究專題中心 臺灣百年歷史地圖 臺灣通用電子地圖
http://gissrv4.sinica.edu.tw/gis/twhgis_ja_JP.aspx
 資料：現地調査 (2017年 5月・10月) 並びに『彰化縣工商消費電話簿』・中華電信黄页
<http://www.jyp.com.tw/> により松井秀郎作成。

図4 彰化縣鹿港鎮の中心市街地における諸店舗・事業所・施設の分布 (2017年)

と歴史観光都市としての性格を支える機能とが混在している。そこで、鹿港鎮の中心街について、「公務・公共サービス」、「金融・保険業」、「不動産（仲介）」、「貿易」、「診療所・医院」、「時計・眼鏡類」、「珠宝（宝飾品）」、「食品餐飲」、「麵包・糕餅（パン・もち菓子類）」、「宗教用品（仏具）」、「宗教施設・寺廟」の11項目を取り上げ、これらの店舗・事業所・施設の分布図を作成した（図4）¹²⁾。これらの店舗・事業所・施設について、1) 主に地方中心都市としての諸機能を担うと考えられるもの、2) 主に歴史観光都市としての諸機能を担うと考えられるもの、3) 地方中心都市・歴史観光都市の両者に関連する諸機能を担うと考えられるもの、以上の3つに分けて鹿港鎮の中心市街地における諸機能の配置について考察した。

1) 主に地方中心都市としての諸機能

ここでは「公務・公共サービス」、「金融・保険業」、「不動産（仲介）」、「貿易」、「診療所・医院」、「時計・眼鏡類」、「珠宝（宝飾品）」の店舗・事業所・施設について取り上げる。

まずは行政的な機能の配置として、「公務・公共サービス」に関する店舗・事業所・施設の分布について検討する。彰化県や鹿港鎮の行政機関については、東京都の都心で例えれば銀座4丁目の交差点に相当する中山路と民権路との交差点から、北東側の地域（民権路をX軸・中山路をY軸とすれば第1象限の範囲）にこれらの多くが集中している。これらの中には台湾の中央機関である労働部労働力発展署中彰投分署も含まれ、中心市街地の最も外側の環状道路の一部をなす中正路沿いに立地している。地方機関については鹿港鎮民代表會・鹿港鎮公所・彰化縣警察局鹿港分局・彰化縣消防局鹿港分隊・鹿港鎮戸政所・鹿港鎮地政所などもこの範囲に分布している。一方、鹿港鎮に置かれている各里の出先である辯公處（事務所）は、鹿港鎮の市街地の周辺部に分散している。

「金融・保険業」に関する店舗・事業所では、中心商業地域の中山路沿いに分布するものが多い。中でも中山路と民権路との交差点近くには金融機関（銀行）の集中が見られる。信用金庫・投資企業・保険業については中心地域から分散した分布となっている。

「不動産（仲介）」に関する店舗・事業所については、中山路沿いに立地するものは少なく、これらの多くは中山路よりも北東側の中心商業地域と住宅地域との間や外側の環状道路の中正路に分布している。「貿易」に関す

る店舗・事業所・施設は少ないものの、「不動産（仲介）」と同様の中心商業地域から離れた道路沿いに立地している。

「診療所・医院」については、中山路・中正路・民権路・民族路・三民路・復興路などに分散している。大規模病院については道路幅も広くまとまった敷地の確保できる中正路沿いに立地している。

「時計・眼鏡類」の店舗は、中山路の民族路との交差点付近とこの南西側の鹿港第一公有零售市場（鹿港第一市場と略す）の周辺に集まっている。これらの他の店舗も中山路に沿う中心商業地域に立地している。「珠宝（宝飾品）」についても「時計・眼鏡類」とほぼ同じ傾向の分布を示している。

2) 主に歴史観光都市としての諸機能

鹿港鎮の中心市街地における観光資源は、まずは鹿港老街・鹿港中山路老街とこの周辺のかつての富豪の旧居（意楼・丁家大家など）と小路地（九曲巷・摸乳巷など）であり、また鹿港天后宮・新祖宮・鹿港龍山寺・文武廟などの寺廟である。こうした古蹟の周辺には観光の要素の高い店舗・事業所・施設が分布している。「宗教施設・寺廟」への参観や参拝・進香（母廟などへの分祠廟の巡拝）と共に「宗教用品（仏具）」の店舗の存在も「鹿港」の魅力の1つである。李昭容（2004）は、「鹿港木作家具業の歴史考察」で生産される祭祀家具（神卓・奉神櫃・光明燈座・鐘架・鼓架など）について取り上げている。これらについても市街地の仏壇仏具店で扱われている。

「宗教用品（仏具）」の店舗については、これらのほとんどが中山路に沿って分布している。中山路に沿う地域でも大凡2つの地区に集中している。一カ所は中山路沿いで民権路との交差点から鹿港天后宮辺りまでの地域、もう一カ所は中山路沿いで民族路から三民路までの間の地域である。この地域は、鹿港鎮の中心市街地から彰化市を結ぶ彰鹿路沿線に並ぶ神卓・神像・仏像・仏具・仏壇の製造販売店との連続性も想定される。

「宗教施設・寺廟」については電話帳に記載されているものを中心として分布をみた。すなわち鹿港鎮内には59の寺廟¹³⁾があるとされるが、ここでは日常的に管理者が寺廟施設に詰めていると考えられる「宗教施設・寺廟」について取り上げた。鹿港天后宮・新祖宮など、これらの分布では清代からの開発の歴史を有する鹿港の市街地北西部の地域に多くが集中する。その他については、古市街から移転された鹿港龍山寺を含めて大部分が旧鹿港溪と中山路との間の地域に分布している。

3) 地方中心都市・歴史観光都市の両者に関連する諸機能

都市内に分布する各種の店舗・事業所・施設は、もとより単一の機能を果たしているわけではない。例えば飲食業の店舗についても地方中心都市としての機能と観光都市としての機能とに単純に分けることは出来ない。ただ、それらの分布する位置によって地域住民の利用の多い店舗と、観光客の利用の多い店舗があり、これらの店舗での販売品目や商品パッケージ・店舗のディスプレイなどを見ることによって、どちらの機能が強いのかについてある程度判別することが可能となる。

「食品餐飲」には水菓販売・飲料販売・飲食店・食堂などが含まれる。これらは市街地内の比較的広い範囲に分布するが、まずは鹿港第一市場とその周辺、また鹿港天后宮の近辺に集中している。これらの地域には祝祭日や祭祀などの行事のある日には多くの参拝者が訪れ、観光客による利用が多い。民権路・民族路・鹿東路・彰鹿路などに点在している店舗では、観光客の利用もさることながら、日常的に外食文化の根付いている台湾の住民利用の便宜も関わっている。観光スポット周辺のみならず住宅地域にも「食品餐飲」の店舗が分布する所以である。

一方、「麵包・糕餅（パン・もち菓子類）」の店舗については、観光客が土産物にしたり、その場で買っての立食もある。鹿港天后宮の近くでは「食品餐飲」の店舗数より更に多くの集積が見られ、鹿港第一市場周辺への集積も見られる。中山路と民族路との交差点から、南方にある中山路と三民路との交差点までには、中山路の南西側にほぼ等間隔で店舗が立地しており、この中には土産品として人気のある肉まん店や「百年老店」と称する鹿港鎮でも有名な菓子店もある。また、民権路や民族路の周辺では中正路との中間地域に数店の「麵包」の店舗が点在している。

4) 諸機能の地域的配置の特徴

1)・2)・3)で、主に地方中心都市としての諸機能、主に歴史観光都市としての諸機能、地方中心都市・歴史観光都市の両者に関連する諸機能に分けて検討してきた。これらから鹿港鎮の中心市街地における諸機能の地域的配置について、分布に特徴のあるものについて大観してみる。

1. 現在の鹿港鎮の中心市街地の核となる中山路と民権路との交差点から中山路と民権路とに挟まれた北東側のセクターには、地方中心都市としての行政機能が集積している。

2. 地方中心都市としての金融機能の中で、銀行は中山路に沿って中山路と民権路との交差点を中心として集まっている。また保険業の機能は市街地周辺地域の主要道路沿いに分散している。

3. 高級買回り品の一種と考えられる珠宝（宝飾品）の店舗については、中山路と民権路との交差点を中心としているものの、銀行よりも中心市街地の核から若干外側の位置に分布している。

4. 同様に買回り品と考えられる眼鏡・時計の店舗については、中心市街地の核からは珠宝（宝飾品）の更に外側に分布し、また鹿港第一市場の周辺にも比較的多く分布する。

5. 飲食業の店舗や鹿港の土産物となるパン・もち菓子類販売店舗の集中地域は、鹿港天后宮の周辺地域と鹿港鎮第一市場の周辺地域の二カ所である。また、中山路に沿ってパン・もち菓子類販売店舗が南西側ではほぼ等間隔に点在している。

6. 「宗教用品（仏具）」の店舗については、ほとんどが中山路に面して立地しており、なかでも①中山路と民権路との交差点から鹿港天后宮辺りまでの地域、②中山路沿いで民族路から三民路までの間の地域、といった中山路の商業地域では両端部に近い二カ所に集中している。

7. 「宗教施設・寺廟」については、鹿港老街・鹿港中山路老街と並ぶ観光資源であり、清代からの開発の歴史を有する鹿港の市街地北西部の地域に多くが集中する。

このように見てくると、諸機能の地域的配置の特徴として、鹿港の中心市街地を貫く背骨となる軸は中山路であり、またこの中心核は中山路と民権路との交差点となる。行政機能はこの中心核の北東セクターに集中している。また、中山路沿いに中心核から北西方向の鹿港天后宮方向と南東方向の文武廟方向の双方向に、それぞれ銀行→珠宝店→時計・眼鏡店→宗教用品店（金融→高級買回り品→買回り品→世代的購買品）の配置が見られる。そして市街地の中で鹿港天后宮と鹿港第一市場とは、飲食業の店舗や鹿港の土産物となるパン・もち菓子類販売店舗の2つの集中地域となっていることが明らかとなった。

5. むすび

鹿港鎮の中心市街地の形成は、海岸地帯に北頭漁村という漁業集落はあったものの、そこは離れた旧鹿港溪の港町から始まり、ここが現在では鹿港老街として古蹟保存区となっている。この港町から鹿港溪と並行して設

けられた不見天街とも呼ばれた五福大街は昭和初期の都市計画によって現在の中山路老街となった。鹿港鎮の市街地観光では、まずこれらの2つのタイプの老街が同時に見られることが魅力である。更に、数々の特徴ある建築様式の寺廟を参拝・参観できることや、これに関連する仏壇・仏具などの伝統産業もあり、漁村来歴の海産物・海鮮料理や、歴史都市ならではの名物・伝統菓子もあることが観光面での文化的膨らみを生んでいる。

このように観光資源の豊かな鹿港鎮ではあるが、中心市街地の人口変動をみると、古くから発展してきた里では人口減少の傾向にある。彰化県は、「鹿港」の観光開発と発展を目指して国家歴史風景区の設置への取り組みを進めており、今後の地域的変化の著しい事が予想できる。

本研究では、こうした状況下の鹿港鎮の中心市街地について、都市の諸機能を発揮する限られた業種の店舗・事業所・施設についての分布から、これらの諸機能の配置の特徴について検討し、この特徴について4章4)で明らかにした。日本とは生活文化の異なる台湾では、自ずと都市機能・商業機能そのものにも日本とは異同があり、人々の価値観や嗜好も日本とは異なる事から行動様式・購買行動にも相違がみられ、選定した商業機能も限定せざるを得なかった。今後にはこれらの点にも更に関心を深め、鹿港鎮の中心市街地の地域構造について追究していきたい。

注

- 1) 日本統治時代（1895（明治28）年～1945（昭和20）年）に関する表記では、著者の立場や考え方によって「日據時期」や「日治時期」が用いられるが、原則として原著の表記を用いている。
- 2) 筍延殘喘の日本語訳（かろうじて保持）については、著者の意識である。
- 3) 遊客は観光客と同意義である。本論文で引用した台湾の統計表における遊客数については観光客数と読み替えた。
- 4) 道路名については写真2の鹿港鎮観光導覽地圖を参照。中山路の命名の元は孫文（孫中山）であり、中正路の命名の元は蔣介石（蔣中正）、孫文の唱えた三民主義（民族主義・民権主義・民生主義）に因んで、三民路・民族路・民権路・民生路が生まれたとされている。
- 5) 中華黄页はインターネット上の電話帳である。
<http://www.jyp.com.tw/>（最終閲覧日2017年11月29日）
- 6) 台湾での人口統計の取り方（出生・死亡の届け出を毎月末に集計する）は日本での住民台帳人口に近いが、住民移動（社会変動）を反映していないために戸籍人口（自然変動）と理解した方が適切である。

- 7) 「台湾交通部観光局 観光統計資料庫 來臺資料」による。この統計では来台旅客について、外籍旅客と華僑旅客という区分を用いている。台湾への業務や留学などの観光目的以外での旅客数は、いずれも100万人未満である。年によって目的別統計区分の変更もあり、ここでは全旅客数で示している。
- 8) 彰化縣政府旅游資訊網による。「9カテゴリー」に関する（ ）内の日本語訳もこのサイトによるものを基に修正を加えた。
<http://tourism.chcg.gov.tw/JP/hopSpotList.aspx>（最終閲覧日2017年11月29日）
- 9) 観光型工廠の数については下記の「政府資料解放平臺」の「観光工廠名録」によった。
<https://data.gov.tw/dataset/6848>（最終閲覧日2017年11月29日）
- 10) 老街は大陸でも台湾でも用いられる旧市街地を示す一般名詞として、また歴史ある街並みとして日本の伝統的建造物群と同様の用いられ方もする。中国大陸とは異なり、台湾での都市形成は古いところでも清朝時代であり、三合院・四合院などの歴史的建築様式を維持する建物や建物群、また日治時代の建造物（政庁・駅舎など）や街区などを、老街として保存・修復して観光地域化に役立てようとしている。
- 11) 「亭仔脚」は日本の雁木・小見世と似ており、建物の道路側に屋根掛けして設けられているもののほか、主屋の中に設けられているものも多い。
- 12) 衣類・洋品販売については、中心市街地性を測るのには適当な指標と思われるが、台湾でのこれらの購買行動の時代的変遷や世代的相違については検討の余地があることから、今回の対象から外している。
- 13) 寺廟の数については彰化縣文化局『彰化縣 鹿港聚落活化暨環境整合計畫案』による。

文献

- 彰化縣鹿港老街發展促進會（2008）：『悦讀 鹿港老街』。80頁。
- 彰化縣鹿港鎮公所（2007）：『鹿港老街 心樂園』。118頁。
- 彰化縣文化局（2008）：『彰化縣 鹿港聚落活化暨環境整合計畫案』。297頁。
- 賴志彰（2004）：鹿港市街歴史變遷之界面研究。『二〇〇四年彰化研究兩岸學術檢討會—鹿港研究論文集』。341-359。
- 中鉢令兒（2015）：台湾における廟と文化観光～流行化した宗教と地域の賑わいを視点として～。北海道地域観光学会誌。第2巻。第1号。10-18。
- 徐秀珍・蔡進發・葉時碩・黃宗成（2004）：遊客人數預測研究：以鹿港為例。『二〇〇四年彰化研究兩岸學術檢討會—鹿港研究論文集』。385-396。
- 黃世輝・田中みなみ・三橋俊雄・加藤純一郎・宮崎清（1997）：台湾鹿港の地域づくりにおける龍山寺の役割と可能性—寺廟文化を活かした地域づくりの方法。デザイン学

- 研究, Vol.43, No.6, 51-60, 1459-1468.
- 李東明・波多野純 (2001) : 台北市迪化街におけるアーケード付き街屋建築の成立と変遷. 日本建築学会計画系論文集, 第457号, 237-242.
- 李昭容 (2004) : 鹿港木作家具業の歴史考察. 『二〇〇四年彰化研究兩岸學術檢討會—鹿港研究論文集』, 429-454.
- 松井秀郎 (Matsui) (2017) : 台湾彰化県鹿港鎮における市街地の拡大について. 地球環境研究 (立正大学), Vol.19, 95-102.
- 茂木計一郎・片山和俊・大行 征・豊田聡朗・手鳴尚人 (1991) : 騎楼型民居の構成に関する研究. 研究年報No.18 (住宅総合研究財団), pp.1-15.
- 西川博美・中川 理 (2013) : 台湾老街における町並み保存事業について. 日本建築学会計画系論文集, 第78巻, 第685号, 725-733.
- 西川博美・中川 理 (2014) : 日本統治期の台湾の地方小都市における亭仔脚の街並みの普及—市区改正計画との関連を中心として. 本建築学会計画系論文集, 第79巻, 第700号, 1459-1468.
- 佐藤和美 (2011) : 日台関係における「人の移動」—来台日本人観光客の動向と台湾の観光競争力—. 人文學報 (真理大学), 第十一期, 93-110.
- 施添福主持・鹿港鎮志纂修委員會〔編纂〕 (1998) : 鹿港鎮志・地理篇. [彰化縣] 鹿港鎮; 彰縣鹿港鎮公所, 289頁.
- 黄文彬・莊翰華 (2004) : 台湾早期河岸市街空間結構模式建構之研究—以鹿港為個案. 『二〇〇四年彰化研究兩岸學術檢討會—鹿港研究論文集』, 127-143.
- 葉大沛 (1997) : 『鹿港發展史』, 左羊出版社, 1039頁.
- 中華電信股份有限公司 (2016) : 「105-106年版 彰化縣工商消費電話簿」, 353頁.

Regional arrangement of city functions in Lugang Town, Changhua County, Taiwan

MATSUI Hideo*

* Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University

Key words: Taiwan, Lugang Town, Urban function, *Lao-jie*, Regional arrangement